

餘り長くなるからこの位にて何れまた第二回の折としませう其時面白い事を御知らせいたさう終りに諸君の成功と健在を祈る

大正七年七月一日（滿期迄百五十日）於横須賀 ひげ公

變つた上田

杜 峯 生

上田も變つた、學校が出来た時分から見るとほんとに上田も變つた、支部會などに行くとき古い同窓から上田のことを聞かれるが、その説明が困難な程變つてゐるのに自分ながら驚くことがある、自分と同期のH君なども北寮のあとから學校迄何度も道を聞いてきたと云つた、先度も或る同窓と櫻木町を——なんて言つたつて知らない人も多いだらう——肩を並べて歩いてゐた、すると「君横町は焼けたのか」といふ、ナニ横町は焼けやしない、あの横町の東の裏、金山町を越えてまた一ト町出来たんだ、一ト町どころかそのまた東に日ノ出町といふのが出来たのだ、イヤ新しい町の名を挙げ初めたら十指を折つても足りやしない、それが主に學校のある上田市の——ウんこれも元は上田町だつたね——東の方に出来たのだからたまに學校へ来て見るとツア判らなくなる、間違へて裏の蠶業學校——これも權現坂から母校の北裏へ引越した——なんかへ飛び込まないものでもない。

學校の裏と言へばあの邊は元全くの田圃で、養蠶に宿直しての歸り途、ねむい眼を擦りながら田の畦を通ると蛙がゴロゴロ鳴いてシヤクに障つたものだ、それが今では玉屋のところ——これは困つたな、玉屋だつて元は踏入の南寮の近くにあつたのだが引越して見違へる程立派な？宿屋になつてゐる——で判らなければ平尾の角デルタのところ、あれから眞直ぐに四間道路が女學校——元師範學校にするとして建てた——あの邊までずつと出来てゐる、これが即ち日ノ出町だ、世界中の都市が東へ東へと移るそうだが、上田も御多分に洩れず東の田圃はいま一杯になつて終ふだらう。

學校が出来た頃、一回の人だつて知らない頃だ、自分も中學生時分だが、地鎮祭をやつて常田の獅子が敷地で舞つた頃は學校のところだつて一面の田畑だつた、丁度太郎山へ蕨折りだつたか葎とりだかに登つた日であそこへいまに國立の學校が出来るんだそうだなんで人ごとのやうに指さしてゐたのを思ひ出す、それから暫くすると本館がポツンと一つ出来て狐にバカされたやうに田圃の中に轉がつてゐたものだ、それが今では樹木にすつかり包まれて、藪になるやうな潤ひのある校舎になつた、初めて桑畑を作るために製糸科のものも皆出て天地返しをやつた頃から見れば雲泥の違ひだ、學校のことを書き初めると限りがないから他日にゆづつて再び「變つた上田」のことに戻る、上田の北に太郎山があつて南に千曲川が流れてゐることに少しも變りはない、けれど千曲川——チクマ川だから忘れちあ困る——の向ふの城下村が合併されて小牧山須川のテツペン迄も上田市である、アルバムにはよく須川から撮つた上田の寫眞を入れたものが、今出して見るとその分野が大變に變つてゐる、千曲川には元の赤い上田橋がその少し下流へ架け換へられて青い鐵骨、木煉瓦舗装の素張らしいものとなり、それと並んで赤い鐵橋が一つかけられて、その上を別所田澤行の温泉電車が走つてゐる、昔し上田の驛に降りると驛前に圓太郎馬車が待つて居てラツバを吹き「ベツソへ行きませんかベツソへ」と客を求めてゐたものだ、その影も今はなし、驛ですぐに百人乗ボギーの素的な電車に乗れば三十分ばかりで別所にゆける、かやうに便利になつたためもあらうが別所の湯に浸つて勉強しながら卒業試験に學校へ通ふことを今の學生は知つてゐる。

上田の驛からはまた別に町の西北を一周して傍陽——兎狩にゆく村——の方へ行く電車がある、これに乗つて先づ「公會堂下」で降りると公園の入口、元の監獄の前へ出る、監獄は他へ移轉してそのあとにテニス・コートと兒童の運動場が出来て、その南に公會堂が大きく建つてゐる、更に公園をつき抜けて蠶業試験場の方へ出ると上田に過ぎものと言はれる大野球場と尙その北に競技場とがある、かやうに一廻りして北大手驛から再び電車に乗ると、太郎山の下の方を廻つて、あのお寺の澤山にある新田の裏を通つて川原柳の方へ行ける、自分のクラスのI君がかつて何かに大いに

失望を感じて皇蓮寺のお墓をさまよつてゐたのを連れ戻しに來たことを思ひ出すが、今ぢあお墓も電車通りだ。

川原柳からは角間の紅葉狩りでも、傍陽の兎狩りにでも、又山の湯鳥帽子の登山でも電車で樂々で行ける。

川原柳から愛宕町といふ新しい町を南へ下ると小學校東校と女學校と警察とが三ツ角に向ひ合つてゐる、女學校の前通りが水道町と言つてその通りを東へ染屋の高台に登ると水道の貯水池がある、貯水池の芝生で染屋の林檎を嚙りながら下の方を見れば誠に眺めがよいので秋になると學生が澤山に出かける、女學校の西近くに丸子電車の上田東驛がある、丸子へはこゝから三十分で行ける、この電車は常田池の近く、學校の寄宿舎の裏にある染屋驛を通つて堀、國分寺を経て丸子に行くのである、昔し國分寺に下宿して學校へ通つた人が田舎落だと言つたが、今では電車で町へ活動寫眞を見に來ることも容易である、上田東驛といふのは大門町にある、大門町といふと昔しの壽(コトブキ)即ち北寮のあつた家をつき抜いて海野町を眞直東へ前にも言つた櫻木町迄開けた道で、北寮を目標に來たものが迷子になるのも無理はない話さ、大門町に三徳商會といふフォードの自働車屋があるがこれは製糸科卒業生の經營だから序でに廣告して置く。鷹匠町——つていふと西寮の前の熊野小路を下つたところだが——あの邊も全く人家で埋まつて終つて、驛から學校への順路として何年ぶりかで通つた人は驚くに違ひない。

夜の町、そうだ夜の町も随分變つた、昔しは軒燈一つ無く、町は眞暗闇だつたが、今はすっかり街燈で輝き、昔しのでやうな格子戸造りがなくなつて近代式なショウウインドウで明るく飾り付けてある、末廣座が上田劇場に變り、活動の常設館が二つ殖えて夜の退屈さは後を絶つた、カフェーの殖えたことも大變であるが、幸なるかな今の學生には禁酒令が布かれてゐるから間違ひはない筈だ、然し寮の炬燵で書生のヨーカンを嚙つてばかりもゐまい、たまには出前持の提灯も入らうといふものだ、話が脱線して今更後へ歸れないから茲で筆を擱く、いつまでも田舎だと思はないで學校に何か催しのある時には力めて出て呉れ、そんなに粗末にはしないつもりだから。——(三〇・一一・一五)